気配りの日本 個性は苦手

彭飛（ポン フェイ）さん
京都外国語大学教授

1958年生まれ。専門は日本語・日本文学。著書に「日本語の『配慮表現』に関する研究」など。

1984年末に留学生として来日して以来、日本語や日本文学について研究し、博士号も取得しました。日本語は勉強すればするほど、上達すればするほど、ますます難しくなってくる言葉だと思います。中でもやっかいなのが「配慮言葉」です。

日本語にはさまざまな配慮言葉があふれています。例えば、「ちょっと予定があって行けません」の「ちょっと」、「とりあえずご報告します」の「とりあえず」のように、文頭に枕として置き、話し手の意思を柔らかくしたり、「お茶でも飲みませんか」の「でも」のように文中につけて断定的な言い方を避けたりする言葉。これらはみな相手への配慮、気配りから生まれた表現なのです。

また、英語や中国語は「あなた」や「私」を省略しませんが、日本語では「あなたは何を食べますか」だと、何となく語調が強くなることから、単に「何を食べますか」とだけ言っています。

こうした日本語の配慮表現は繊細で、外国人には難しい。「すべりやすいので気をつけてください」の「ので」は「すべりやすいから」と言うより、丁寧な印象を相手に与えます。でも、英語や中国語のネイティブでは、どんなに日本語を勉強しても、「ので」と「から」の微妙な使い分けはなかなかできません。

長い歴史の中で形作られた数多くの日本語の配慮表現は当然、日本人の国民性と深く結びついています。配慮表現がこれほど豊富に存在し、日本人が無理せず細やかに使い分けられるのは、日本人がみなほぼ同じパターンの行動や思考スタイルを共有している国民だからこそなのです。逆に言えば仲間うちだからこそ通じあえるのが、日本人同士の「配慮」なのです。

このことは言葉だけでなく行動にも言えます。日本人は仲間うちではない、何か変わった存在や個性的な主張ができたときに、それを扱うのが下手な国民です。相手が誰であろうと、決められた1種類のパターンでしか応じようとせず、相手に応じた臨機応変な対応ができません。

その結果、配慮が配慮にならないことがあります。例えば子育て中の女性の働き方にしても、いちばん大事なのは、その女性が個々の家庭の事情に応じていくつかの選択肢から選べることです。形式上は「勤務配慮」の形をしていても、1種類しかなく、肝心の本人が選ぶことができないなら、いくら目的が「配慮」であったにせよ、押しつけになるかもしれません。

対人表現は非常に豊かな日本語ですが、気持ちがこもっていないと、通り一遍の冷たい印象を与えます。配慮に血を通わせるには、違うものに対する寛容さがもっと必要なのではと思います。

（聞き手・中島鉄郎）

2018年11月2日（金）朝日新聞・朝刊（13面・オピニオン）